

全校のみなさん、おはようございます。

五月末の伊那谷の景色は、雪化粧をおとしたアルプスが濃密な緑を解き放ち、田植えが終わった水田には鮮やかな緑の絨毯がしかれています。

さて、数年前に流行した新しい病の影響もあつて、普段の生活でマスクをしている人を沢山みかけます。「感染予防」ということで、マスクを外せない人もいることでしょう。

しかし中には、風邪や花粉症でもないのにマスクをつける人もいます。事情は様々ですが、マスクをすることで、口元や自分の気に入らないところを隠せる安心感もあるのでしょう。また、マスクを外すと落ち着かなく、まるで心を見透かされたような気分にもなる人もいると聞きます。

かつて、このような怪我でも病気でもないのに、マスクをつけていることを「だてマスク」と呼びました。今はそのような指導はありませんが、本校でも以前は、学校や社会というのは学びの場であり、その姿勢は常にオープンスタンスであることから、怪我や病気でない限り、人と話すときは顔を出しなさいと指導したことがあります。

『蓮如上人御一代記聞書』（れんによしようにんごいちだいききぎがき）という書物に、「蓮如上人、仰せられ候う。「物をいえいえ」と、仰せられ候う。「物をいわぬ者は、おそろしき」と、仰せられ候う。「信不信、ともに、ただ、物をいえ」と、仰せられ候う。」という言葉があります。物事は自分で聞かないとわかりません。いつまでも傍観者のままでいると何もわからない、ということ蓮如という方は言っているのです。

「だてマスク」に限らず、とにかく私たちは相手に対して本心を語る事を避ける場面が多いです。それは、本心をいうことで相手にどう思われるか、もしかすると嫌われるのではないかと警戒するからでしょう。もちろん人間関係ではそのように考えて発言することも、大事なことにはちがいありません。しかし、顔を隠すように、物をいわないと、間違っていることを直すこともできません。

物をいうことはマスクを外すことと同様に勇気がいることかもしれません。授業でも、クラブ活動でもただ聞いて終わるのではなく、自分の中におこった問をたずねて聞いてみるのが大事なのではないのでしょうか。